

<書評>

鈴木哲也、2020、『学術書を読む』、京都大学学術出版会。

来栖 正利*

Masatoshi Kurusu

はじめに

向上心や向学心旺盛な読者は、自身の関心領域（専門分野）に加えて「専門外の専門知識」の「学び」の機会をしばしば熱望する。しかしながら、この「学び」を学術書の読書によって得ようにも、最善な学術書を選書する術を持ち合わせていることが少ない。というのも、細分化しすぎた学術/学問体系が読者の「学び」の意欲を削いでいるからである。この「学び」を促す学術書の選書に関する私論を鈴木（2020）は展開した。これをまとめ、私見を述べるのが本稿の目的である。

学習の便宜を図る必要上、指定した書籍（教科書）を初回の講義から持参する履修者の数が「低数」で推移している。この事実は、残念ながら、特段珍しくない。というのは、知的好奇心を満たすために高等教育機関に進学している学生に出会うことの方が圧倒的に難しいと評者（来栖）は実感しているからである。「大学のレジャーランド化」という表現が死語になるほど、高等教育機関の存在意義が色褪せ、大学生が大学生であることの意義を見出すことが困難になっている。

大学教育の大衆化を踏まえ、高等教育機関は存在意義を再考する必要がある。細分化しすぎた学術/学問体系の中から、大衆教育の内容をどのように決めるべきか。「小さく完結した学問」を数珠繋ぎの如く習得した学生にその修了を認めることの意義は何か。大衆教育を修了した学生はどのような教育効果を享受できたと考えることができるか。大学教育の大衆化に対するあまりにも素朴すぎる疑問を抱く機会を提供した鈴木（2020）を考察する本稿は、次のような構成からなる。

まず、三部構成からなる鈴木（2020）に沿って、第I章を三節に分け、鈴木（2020）の第I部から第III部に対応する各々の内容を要約する。そのさい、損なわない範囲で加筆修正を施し、鈴木（2020）の考察内容を理解しやすいように努めている。次に、私論を展開するために第II章を設ける。これを鈴木（2020）に対する内在的批判を志向した第1節とこれを受けた市場活性化策と題する評者の提案を述べる第2節とに分ける。そして最後に、要約を行い本稿のむすびとする。

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

(2021年9月22日受理)

©2022 UMDS Research Association

I. 本文紹介

1. 問題意識¹⁾

鈴木（2020）は次の問題提起に基づいて執筆された。①専門分野を持つ大学院学生の探究心を満たすために関連/派生分野の学びを始めるにも、最初に読むべき当該分野の書籍を見定める術がないとする意見である。②講義内容に触発された学部学生が所属学部/学科以外の開講科目の履修を通じた学びが困難であるとする意見である。これらに基づき、専門分野/主専攻に加えて関連/派生分野を学ぶ重要性和この最善な導きを促す専門外の学術書の選書方法を鈴木（2020）は考察した。

ここで考察対象とする「学術書を『学術的な問題意識をもって、学術的なトレーニングを受けた者が、学術的な認識・分析方法と作法をもって書いた本』（p.12）と定義づけた。これは読者層を高等教育機関で現在学ぶ人々と近い将来これを希望する人々を念頭に置き、考察内容の散逸を防ぎ、時空を超越して培われる「人の精神価値の本質に関わる問題…を共有する…専門、職業、社会的な立場を越えた『現場の哲学』（p.19）の学びの重要性を強調する意図に基づく²⁾。

「現場の哲学」は自生するものではあり得ず、生きる時代や生活する場所の人間の価値を昇華した歴史観や言語観を織り込んだ行為規範と等質/等価なものである。ただし「現場の哲学」は協同社会を構成する人間の思考/価値観とともに止揚する。したがって、「新しきこと」を学び、「古きこと」のさらなる洞察を得る必要がある。これは断片的に見える「古きこと」を探究/追究し、新たな含意を付与して更新した「新しきこと」を世に問うた学術書との対話を通じて可能になる。

なお人間の価値観の止揚とは、その機能である「適応」、「超越」、そして「自省」の「力関係」が普遍/不変ではなく、動静に応じた修正の必要性和有用性を説いていることを示唆する。ここで「適応」とは日常生活の充足を図る実用主義を、「超越」とは「適応」を包含する理想主義を、そして「自省」とは自らの行為を反省する懐疑主義を意味する。これらは三疎みの状態にあるものの相互作用によって自らの価値観を改善し、個人ひいては協同社会の成長に貢献している。

しかしながら、『『わかりやすい』パラダイム』（p.38）と称する難解な学術書に対する強い要望は前述した協同社会の成長への貢献度を弱める可能性をはらんでいる。学術書を執筆する学界に所属する研究者の研究業績の評価規準が学術書出版から研究論文公刊重視へと変化した³⁾。これによって、当該研究者は一定程度以上の共有知識や予備知識をもつ読者（査読者や編集者）を意識した研究姿勢に傾注し、「筆舌を尽くして説明する」姿勢を稀薄にしてしまっている。

「『わかりにくい』と言われる本は…理解するにはそれなりの根気と時間と好奇心を必要とする」（p.35）ものの、「含蓄」がにじみ出るような学術書の読書は「実用的」でもある。というのも、学生時代の読書経験が卒業後の読書習慣づけと有意な相関関係にあることに加え、現在の所得水準とも有意な相関関係にあるという発見事項を実証分析の実施によって得たからである。ただし、「学問的な精密さや深さに欠ける」学術書は読者に学びの機会を与えてくれる可能性が低い。

「テーマへの関心と多少の粘り強さがあれば、専門外の者でも全く理解不能というわけで」(p.35) はない学術書であっても、研究業績に関する価値観が上述のように変貌している研究者と専門外の読者との間で「わかりにくいことがあれば丁寧に説明する、説明に丁寧に耳を傾ける」(p.41) というコミュニケーションが息を吹き返せば、専門外の読者の持続的な学びを促し、その時々の変化に知的かつしなやかに対応できる「知識基盤社会」の構築に有用である。

2. 選書方法⁴⁾

専門外の学術書の選書方法を読書歴に基づいて述べる。そのさい、選書に費やす労力と選書後の読み方に費やすそれも異なったという実体験を踏まえ、読者の関心事項の濃淡と学術書の属性を勘案した四区分に則って、実践的な選書方法を述べたい。選書対象にある学術書の専門分野との距離感が(A)極めて遠い/関連のない分野からの選書と(B)隣接分野からの選書、または(C)古典からの選書、そして(D)現代の課題を解くヒントを学術書に求めるための選書である。

(A) 読者の専門分野からかけ離れた事項を適切に理解するためには、少なくとも学部教育を学び直すこと、または質量ともに同等の基礎訓練の受講を要する。「地域基盤社会」の構成員として活躍の場がある人々はこの受講機会を持ちえないだろう。そこで、「現場の哲学」に依拠して現代社会の諸課題を熟考し解決を図る価値観を維持強化するには、自然科学であれば科学史、他方、人文社会科学であれば社会文化史、に分類される良質な概説書を読むことが有用である。

これらを読破するコツは考察対象の(a)時の経過(b)社会動態の記述を、感情移入するがごとく、熟読すること、つまり、著者の思考を大局的に読み取り、それが描く「科学」の道程の理解を試みることである。これは社会の諸課題に対する読者の準拠枠を洗練させ、最善な解決策を見出す「気づき」を増やし、「科学が『歴史の中の人の営み』(つまり)、発見や発明の背景には何らかの形で社会があり、発見・発明が如何に社会を激変させたかを深く考え」(p.52)の機会になる。

登場人物の幾重にも織りなした書簡体小説が描く心/感情の「うねり」は幅広い読者の琴線に触れる可能性が高い。人文社会科学に分類される学術書の考察対象である行為主体の思考や規範は、著者の描き方次第では、多くの読者の共鳴を得る「普遍の真理」たり得る含意になる可能性がある。ただし、個人または集団の行為規範が「局所的」暗黙知を支柱とするが故に、これを考察した学術書の含意が「市民科学」として読者を啓蒙するには、その共有方法の改善が必要である。

(B) 隣接分野の位置づけにある学術書はその著者が掲げた問に着目することで示唆を得ることができる。「大きな問」を読み取ることができる学術書は潤沢な研究実績を裏付けとする卓越した研究能力を有する著者であることを示唆する。これを読み取りながら、読者は自身の関心事項を洗練できると同時に新たな気づきを得ることができるだろう。当該学術書の著者が培ってきた「教養」も併せて学び取り、読者は自身が掲げる課題と先行研究との位置づけが可能になる。

なお注意すべきは学術書の選書に読者の過度な主観を持ち込まないことである。著者の冷静沈着な「研究姿勢」を読み取ることができる学術書は、類似/近似テーマであっても読者と異なる準拠で探究された信頼に足る研究業績である可能性が高く、有益な学びの機会を提供する。というのは、事実やデータの扱い方如何によって、一つの考察対象が「図と地の分離」に類する「複数の事実」として観えてしまう「マイクロ-マクロギャップ」(p.59)に陥る可能性があるからである。

当該ギャップの解消を図る「大きな問」と「対立の架橋」を志向した学術書との出会いは、読者の知見をさらに洗練してくれることに加え、関心ある社会問題に対する最善な解決策の提示ができる能力改善に役立つのである。当該学術書から読者が学ぶべきことは良識ある思考をバランスよく保持することである。なぜならば、一つの見識が多数説または少数説になり協同社会を变容し得る一方、人々を善または悪に感化する可能性を併せ持っているからである。

(C)「専門外の学術書」が数千年前の「今」を述べた古典である場合、多種多様な天文学的人数の読みという「試練」に耐えた「メタ知識」(p.72)を求める選書になる。数千年にわたって読み継がれてきた古典の読書は読者の「根源的な自省」(p.72)の希求に他ならない。当座の課題解決を図るヒントを得るべく古典を読書することは、古典が既に扱っている無定義「思考」や「初期」設問にまで当座の課題の底流を抽出せんとする還元主義的な沈思に他ならない。

(D) 現代的課題の解決策のヒントを学術書に求める場合、その本質が複雑多岐にわたっており、したがって、複数の専門分野に関連しているという理解に基づいて、学術書の選書を試みる。そのさい複数の理念に沿った思考を行うものの、当座の課題解決を検討する際に配慮すべき諸事情に合わせた理念を軸に解決策を考案することが有益である。近視眼的な解決策が新たな「火種」を自ら招くという愚を犯さないことを念頭に現代的かつ実践的な問題を扱った学術書を選書する。

喫緊の課題解決を図る最善な「対話」の相手を選ぶための選書規準は「候補」の著者の思考・考察が冷静沈着かつ体系立っているか否かである。専門分野の「現状把握」を的確に俯瞰できる著者の研究業績は信頼に値する。なぜならば、かかる卓越した研究業績が長年にわたる古典の素養を随所に「隠し味」としている可能性が高いからである。このような「奥行」をもつ学術書の熟読は専門外の読者に重層的・多面的な理解を可能とする有意義な学びの機会を確実に提供する。

3. 専門外の専門書の読書法⁵⁾

「読書法」の類の書籍を検索すると、その出版が1980年代から目につき始め、2000年代に「常態化」していることが明らかになった。これは1980年代以降の新刊出版点数の推移と関連していることを見出した。と同時に、これらの書籍のタイトルや宣伝文に「多読」・「速読」という言葉が頻出することにも気づいた。書籍を多読または速読することに一定の意味を見出す一方、このような読書習慣を奨励せんとする社会の風潮に眉を顰めながら特徴を指摘することから始めたい。

一つは、完結した知識体系または口伝伝承といった暗黙知を文字化し時間をかけて英知・知恵

にまで高める術よりも、必要な時に必要な量の知識を「情報」として賢く入手・消費する技法を身に着けたいという社会の嗜好が相対的に色濃くなっている。もう一つは、ある事項の総合評価（アナログ評価）よりも解析志向が強くなっており、評価対象をデータに置き換えた量的評価（デジタル評価）を好む社会の思考が形成されている。

デジタル評価という「からくり」に好むと好まざるとにかかわらず研究者は組み込まれている。そのさいその維持強化に加担させられていることを憂いながらも研究者はそれを甘受している/せざるを得ない⁶⁾。このような研究環境の中、研究者は幅広い読者向けに予備知識を必ずしも大前提としない多種多様な書籍を公刊し、研究成果の社会還元を果たすべく尽力している。しかしながら、かかる研究者は非専門者である幅広い読者に対する「情報」提供者の域を出ない。

研究成果を「情報」に置換し濃密な学術コミュニケーションを行っている場合であっても、この「目的」が稀薄または劣化していると結論付けざるを得ない。この現状と上述の社会の「ニーズ」とを勘案することで、「情報」の取得目的と扱い方を「読者」に問う瞬間、ある懸念が顕在化する。確証バイアスから逃れることができない「読者（人）」は長年にわたって培ってきた見識を改善する「情報」を賢く利活用しても、その努力が報われない可能性の方が高いというそれである。

『『わかりやすい』パラダイム』・「多読」・「速読」を志向する社会風潮の仕掛け人として学術研究の側に目を転じると、研究者が加害者兼被害者になっていることが見えてくる。研究成果を査読システムに支えられた学術誌に投稿し研究仲間と共有を図る体制は公刊される研究成果が一定の質を保持していることを担保する仕組みとして必要だろう。しかしながら、研究成果の内容評価をインパクトファクターに代理させたことが研究者同士の由々しき「狂騒」をもたらしている。

インパクトファクターの独り歩きを苦々しく思う一方、我が身可愛さのあまり近視眼的に研究課題を選択する研究姿勢への変貌は論文の質を引用件数に代理させた「わかりやすさ」への集約に成功したことを意味する。公刊論文の内容という本質評価に目もくれず、曖昧模糊たる「数値」の独り歩きに右往左往する研究者やそれを特定の手に委ねている現状を甘受する研究者は自業自得と揶揄される被害者である一方、専門外の読者を啓蒙する博識者ではなく加害者でさえある。

複雑な社会生活の中で生じる課題の適切な解決を図る一助として、学術は社会に貢献できる能力がある。そうであるにも関わらず、それを営む研究者は大小さまざまな「悲喜劇」を社会と隔絶した学術界で繰り広げている。学術書の適切な選書を通じて、専門外の専門家たる読者の学びを支援したい。そして、喫緊の課題のみならず将来の布石たる課題解決に外在的批判ではなく内在的批判が実践できる「対話型専門知」（p.124）の豊富な読者が増えることを切望している。

Ⅱ. 感想文

1. 総評

鈴木（2020）を読み終え、コップの中の嵐に現を抜かし現状に疎すぎる研究者を嘲笑的に観ながら、学術書の市場縮小/衰退という現状に直面し、焦燥感に苛まれている姿だけが評者（来栖）の脳裏をよぎった。高等教育機関の片隅に身を置く評者は「経理屋・財務屋」と揶揄される職業を崇高なそれにすることを夢見てドン・キホーテの如く孤軍奮闘している。とはいえ、四面楚歌ともいえる経歴を重ねてきたためか、来し方を淡々と醒めた目で眺めるという準拠棒を評者は持つに至った。

鈴木（2020）の執筆を後押ししたきっかけを再確認しよう。一つは『『どのようにすれば、はじめに読むべき専門外の書籍を探しやすいか』を教えて』（p.6）ほしいという要望である。これは適切な書籍の検索方法の教示を求めている。もう一つは『『結局、私の学びたいことは学べないと感じ』（p.11）たという失望である⁷⁾。これは学習意欲を満たし得ない現状に対する不満落胆である。

鈴木（2020）が提示すべき回答は読者の（学習）目的を自身で明確にする思考方法を詳説した書籍である。目的が明確になれば、この達成/実現に有効な手段の取捨選択が可能になるにも関わらず、鈴木（2020）はこれを所与とした。例えば、データベースが情報の宝庫であるとはいえ、キーワードを入力しない限り利用者は自身の要望を満たすことができない。的確な検索結果を得るキーワードを厳選するための思考の組み立て方に関する鈴木（2020）の知見を評者は知りたかった⁸⁾。

目的が明確になれば、これを実現/達成するための手段を詳説した書籍の案内が次に提示すべきことになる。これは多種多様な方法論・手法を論説した書籍の紹介である。所与の課題解決のために実施する質的/量的研究/調査のために、利活用できる手段が異なる場合があるし、かつ複数存在する。明確になった目的達成のために最も合理的な判断材料を提供する手段の的確な選択に資する予備知識を得るための書籍の比較考察を評者は期待した。

なお所与の課題解決策の一つに絞り込み、その執行が全面解決をもたらすことは極めて稀である。「彼方立てれば此方立たぬ」ことを想定した熟慮の方法を身に着けることは鈴木（2020）が期待する「対話型専門知」（p.124）を兼ね備えた人財育成につながる。利害対立の発生、調整、そして収束に至る経緯を縦横無尽に考察した書籍、つまり、「賢者は歴史に学ぶ」を読者に誘う歴史書を世に問うことは研究者の面目躍如となる。「人間模様」の考察は学ぶべき「普遍の真理」になる。

2. 市場活性化策

鈴木（2020）の置かれた状況を共感できるものの、評者のそれは日々目にする「読者」に対するそれである。高等教育機関を取り巻く環境は濃淡の違いがあるものの、卒業後の社会で役立つ知識の習得を志向する実学礼賛一色と言っても過言ではない。「実学」の定義づけを所与とすれば、

実学教育の実態は「未体験事項の体験」機会が幅を利かしている。これを踏まえ、鈴木（2020）が想定する「読者」の育成方法の一例として、学部教育を前提にした私見を評者は提示したい⁹⁾。

「情報」社会を踏まえ、座学（講義）が提供する知識・知見を「情報（消耗品）」と履修者の大半は考えている。賞味期限がある「情報」を紙媒体とする単位で購入することは名実ともに割が合わない。「名実ともに」といった理由は①提供される知識・知見が場合によっては陳腐化する消耗品になること、②相対的に高価格品の一括購入であること、そして③履修者の情報処理能力の相対的な低下を踏まえたことである。これらを踏まえ、「難問を分割」すべく次のことを提案したい。

紙媒体の書籍に加え講義回数に準じる書面構成を踏襲した、ただし、一定単位に分割、独立させたミニ冊子仕様の「書籍」を編集する。これを各種電子媒体に加工し、ミニ冊子単位の販売を行う。この仕様は履修者、講義担当者、そして出版社にとって「三方良し」になる。一括購入によるまとまった機会損失の一括負担を分割購入が緩和する。これは分割支出の積み重ねが一括支出と同じ結果になるものの、履修者の支出負担を平準化することに貢献する。

「書籍」の分割購入は講義回数毎に内容が完結しているため、学習負担を平準化する。紙媒体の一括購入は講義内容すべてを包括し見通しが立てやすい一方、消費しなければならない「情報」量の多さに履修者の学習意欲が萎える可能性を無視できない。相対的に高い向上心や向学心をもつ「読者」に着目するだけでなく、その有力候補の芽をつぶさず鈴木（2020）が切望する「読者」へと無理なく育成する仕掛けを考案すれば、焦燥感に苛まれる可能性を減らすことができる。

この仕掛けの実質的なメリットは「書籍」の分割購入によって消費しなければならない「情報」量を分割できることが、履修者の処理能力の「フリーズ」を回避することに貢献することである。読解力の貧弱さ故に最善を尽くしている履修者であっても、負担過多な「情報」処理を求めている可能性が高く、当該履修者「苦役」を強いる結果となっている可能性が高い。これは鈴木（2020）が切望する将来の「読者」の有力候補の自滅を誘うことになりかねない。

他方、ミニ冊子毎の課題出題に厳選できることは回収したレポート内容に基づいた「情報」の活用可能性を引き上げる。履修者が提出するレポートは読者の「目」に等しい。これは時代を超えた読者の批判に耐えた古典がたどった「試練」の短期集中版であり、講義担当者が使用した書籍を改定するために参考にできる一次「情報」といえる。幅広い読者の真剣な「目」を反映したそれであることは将来の「読者」の確証バイアスの属性を的確に理解することに有効である。

この一次情報をビッグ・データと呼べば、これは履修者を賞味期限がある消費者とするだけでなく、鈴木（2020）が切望する「読者」を育成するための情報として徹底的に利活用すべきことを示唆する。とはいえ、評者が関係する日本国内の出版各社は、アメリカの高等教育機関向けの出版を手掛ける各社と比較して、上述のような仕掛けづくりに全く関心がないように見える。書籍採用を乞うべく研究室を訪問するか、それを止めカタログを送付してくるだけである。

一次情報を制御・補充できる環境にいることは、履修者の思考・嗜好を抽出、解析し、出版企画できる場にいることを意味する。問題はそれに気づき、「やるかやらないか」である。これはやってみて初めてわかることがあり、「こと」消費の実践に他ならない。計量言語学や認知言語学の研究成果を活かす発想を持たず、「情報」に敏感な履修者を「一見客」のまま見送り続ける限り、研究者と連携する出版社は多額の機会損失の負担からいつまでたっても逃れることができない。

むすび

「専門外の専門知識」の「学び」を切望する読者に対して、これを叶える最善な学術書の選書に関する私論を展開した鈴木（2020）を要約し、私論を展開することが本稿の目的である。良書の読書は読者に新たな専門知識に加え、当該著書が長年にわたって培ってきた「教養」も併せて提供するというのが鈴木（2020）のメッセージである。この簡潔明瞭な主張を誰もが熟知している一方、これを高い実効性で享受できるためのマニュアルは存在しない。

自分に合った読書法を地道に探し、試し、そして身に着けていく、つまり、実行なくして成果なしであると同時に「選書・読書に王道なし」である。著者との対話を繰り返すに値する珠玉の一冊から「目から鱗が落ちる」「学び」を一回でも得ることができた読書は、出会うべくして出会った良書になる。「足るを知る」読書法の確立が最善な「学び」と次の「良書」をもたらす。鈴木・高瀬（2015）と同様、鈴木（2020）も、平易な文章で綴られた多くの「学び」を提供する書籍である。

注)

- 1) 本節は鈴木（2020、pp.5-44）の要約である。
- 2) 特段の断りがない限り、引用（「…」(p.x)）は鈴木（2020）からのそれである。
- 3) 詳細は鈴木・高瀬（2015）を参照されたい。
- 4) 本節は鈴木（2020、pp.47-73）の要約である。
- 5) 本節は鈴木（2020、pp.74-129）の要約である。
- 6) 詳細は鈴木・高瀬（2015、pp.17-31）を参照されたい。
- 7) 鈴木（2020、p.11）の出典は後藤（2019）である。
- 8) 一般に、思考改善のために行うべきことのひとつとして「何がわからないのかをわかるようにする」とことと助言されることがある。この助言に沿った読書法として、アドラー=ドーレン（1997）[外山・横（1997）]は興味深い書籍の読み方を論説している。これは専門外の専門分野の学術書であるか否かを問わず、最適な書籍を選ぶための示唆に富むヒントを提供してくれる。

他方、手に取った学術書の執筆者の「教養」も読み取ることを志向する読者は当該著作の記述内容を著者が「どのように」決めたのかということ、いわゆる「行間を読む」ことにも積極的かつ意識的に関心を持つことが有益である。澤田（1977、1983）は学術書や学術論文の執筆者が辿ったであろう「思索」を再現

し、それを説明している。

9) 例えば、学部学生を念頭に置いた人財育成（教育）に対する私見を来栖（2021、2022）は論じている。

<引用文献>

来栖正利、2021、「『ゆるく』つながりたがる大学生の論理的思考力の改善方法」、『流通科学大学高等教育推進センター紀要』（流通科学大学）、第6号、pp.1-20。

-----、近刊、「探究学習の考察」、『流通科学大学高等教育推進センター紀要』（流通科学大学）、第7号。

後藤太輔、2019、「文系と理系の壁、学びたいことが学べないのでは？ 大学生・丹伊田杏花さんに聞く:論の芽」、『朝日新聞（朝刊）』、(2019年8月16日)、p.11。

澤田昭夫、1977、『論文の書き方』、講談社学術文庫。

-----、1983、『論文のレトリック』、講談社学術文庫。

鈴木哲也、2020、『学術書を読む』、京都大学学術出版会。

鈴木哲也・高瀬桃子、2015、『学術書を書く』、京都大学学術出版会。

外山滋比古・榎 未知子（翻訳）、1997、『本を読む本』、講談社学術文庫。

三中信宏、2019、「学術書を読む楽しみと書く楽しみ:私的経験から」、『大学出版』、No.117、pp.1-8。

https://www.ajup-net.com/wp/wp-content/uploads/2019/02/ajup117_all_190110.pdf （2021年9月10日取得済み）